

ロキファミリアの首脳陣に月兎が混じり込むのは間違っている

はるみや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら月兎。

だけどそこは東方の世界ではなく、ダンまちの世界だつた

目

次

1	月兔は出会いう	縁	2	1
2	オラリオ	女神	3	2
3	女神	入団	4	1
4	入団	冒険者登録	5	6
5	冒険者登録	初ダンジョン	6	7
6	初ダンジョン	弱さ	7	8
7	弱さ	ランクアップ	8	9
8	ランクアップ		9	
9				
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				

1 月兎は出会い

これは夢なのだろう。

俺は目の前の光景にそう思つた。

煉瓦造りの家が無数に並び、馬車が行き交うといった現代日本の首都にはありえない光景。

それに加えて俺はつい先程まで都心を歩いていたはずだ。
夢か幻覚じやなければ説明ができない。
気がかりなのは頬を引っ張つても夢が覚めないことだが、まあそんな夢もあるだろうと傍観していると、不意に強い横殴りの風が吹いた。

俺の髪の毛が風に乗つて靡く。

「つて、え？」

風に靡くほど俺の髪の毛は長くなかつたはずだ。

それに俺の声はこんなに高くない。

慌てて確認すれば、足元に届きそうなほど長い薄紫色の髪が俺の頭から垂れていた。

変わつていたのはそれだけではない。

上は白のブラウスに赤いネクタイ。その上に羽織つている紺色のブレザー。

下は薄桃色のミニスカート。そこから覗く白い太腿。

足元は白の三つ折りソックスに茶色のローファー。

そして、申し訳ない程度に胸が膨らんでいた。

ゴシゴシと眼を擦つて再度見る。

やはり何度見ても胸が膨らんでいた。

ふう、小さくため息。

(いや、まさか女の子になる夢を見るなんてな……)

「おい嬢ちゃん」

夢だから何でもありとはいえ不思議なこともあるものだと達観していると後ろからトンと肩を叩かれた。

振り返つてみれば、下衆な表情を浮かべた小汚ない男がいた。昼間

から飲んでいるのか、その顔色は赤い。

(チンピラに絡まれる夢を見るなんてな……見るからにモブっぽい
し)

「はい、なんですか？」

「さつきから足をチラチラチラチラ晒しやがって、それにその服装。
誘つてんだろ?」

そう言つて男は下品な笑い声を上げる。

更にモブっぽさに加速をかける振る舞いに俺は思わず笑つてしまつた。

刹那だつた。

腹に衝撃が走つたのは。

「おいなに笑つてんだコラ」

見れば男の拳が俺の腹へと入つていた。

「けほつ……え……」

遅れて痛みがやつて来て、俺はたまらずその場に膝をついて咳き込んだ。

(なんでこんなに苦しいのに覚めないんだ……もしかして……これは
夢じゃないのか……)

「おい立てよ」

そんな俺の思いも露知らず、男は下品な笑いと共に俺に近づくと、
髪を上に引っ張つてきた。

「痛……」

痛みから逃れるため、言う通りに立ち上がつた——時だつた。

「ぶへつ!」

俺の髪を掴んでいた男が、どこからともなくやつて来た金髪の少年
の蹴りを食らい、吹き飛んだ。

「大丈夫ですか?」

「は、はい。ありがとうございます……」

差し出された手を取りながら、ゆっくり立ち上がりると同時に、吹き飛
ばされた男が呻き声をあげながら立ち上がるうとしていた。

「テメエ……よくもやつてくれたな」

「ごめん。ちょっと触るよ」

「え……」

少年は俺をヒヨイと抱き上げると、そのまま怒声を上げる男に背を向けて走り出した。

そのスピードは速く、町並みが次々と変わっていく。

（え……）

そんな中、俺の眼は、何かの店なのだろう。一枚のガラスに引き寄せられた。

いや、正確にはそのガラスに映つた、金髪の少年に抱き抱えられる一人の少女の姿に。

見えたのは一瞬だったが、あの姿、見間違えようがなかつた。

鈴仙・優曇華院・イナバ。

某シユーティングゲームのキャラクターに俺はなつていた。

2 縁

「ふう……こんなところか……あつ、身体に触れてしまつてすみませんでした」

数分後、撒いたと確信したのか、少年は俺を下ろして頭を下げた。
(いやいや、頭を下げるのは俺の方だ……)

「いえ、頭を下げるのは私の方です。ですから頭を上げてください」
自動翻訳機でも付いているのか、俺が思った言葉は、そんな言葉に
変換された。

(容姿だけじゃなく……自由に話す権利も無くなつてしまつたのか
……)

啞然としていると、少年は「その……」と声をかけてきた。

「家はどこですか？ この街の人…………ですよね？ さつきみたいに変
人がいないとも限りませんし……もしよかつたら送ってきますよ」

笑顔を向けてくる少年。
善意が眩しい。

いつそこの優しさに甘えて、本当のことをぶちまけて楽になりました
い。
さつきまで都心にいたんだけど気がついたら女の子になつてここ
にいた——と。

「いえ……実は旅の途中でして……」

だけど、俺は言葉を飲み込んで、適当に理由を見繕い、答える。
少年とは初対面だし、そんなこと信じてもらえるとは到底思えな
かつたのだ。

それに、もし信じてもらえたとしても、元男の女なんて知られたら
距離を取られることは間違いなく、こんな知らない地で独りになるこ
とを考えると、言えるはずがなかつた。

「え。 なんですか？ 実は僕もなんです。冒険者になるためにオ
ラリオに向かっている途中なんですよ。貴女はこれからどこへ向か
うんですか？」

オラリオ？ 冒険者？

本格的にここが地球なのか怪しくなってきた。

もしかしたら別世界にいるのではないか……そんな疑問が生まれてくる。

「いえ、とくに目的はなくて……ある場所を探しているんです。……どこにあるか分からぬんですけど」

本当、どこにあるんだろうな、日本。

女で一つでこれまで育ててくれた母さんに感謝の言葉一つも残せなかつたのだ。

未練がない、わけがない。

戻れたら戻りたい。

無論、身体も、だ。

遠い眼で空を眺めていると、少年は「うーん」と腕を組み、提案してきいた。

「……でしたら、一緒にオラリオに向かいませんか？ あそこは大陸最大の都市。その場所の情報も入つてくるかも知れなですよ」
「最大の都市……ですか」

「はい」

確かに大陸最大の都市ならば、情報が入つてくる可能性もある。その案を断る理由もなく、俺は少年の手を取つて頭を下げた。

「よろしくお願ひします……ええつと……」

ここにきて初めて気づく。

そういえば、俺、この少年の名前知らない、と。

ダラダラと冷や汗を流しながら言い淀む俺に、少年は意図に気づいたのか、口を開き、ゆっくりと己の名を告げた。

「僕はフイン・デイムナ。フインと呼んでください。それで……貴女の名前を教えていただけますか？」

「私の名前は——」

何と言えばいいのだろう。男だった頃の名前か？ それとも……。

「——鈴仙・優曇華院・イナバです。鈴仙とお呼びください」

結局俺は、鈴仙と名乗ることにした。

理由は単純で、男だった頃の名前は明らかに男つて感じでこの身体には似合わなかつたから。それだけ。

「良い名前ですね。では少しの間ですがよろしくお願ひします、鈴仙」

「はい、よろしくお願ひします、フイン」

俺は、少し罪悪感に駆られながらも、ニコニコと笑みを浮かべ、手を差し出してくるフインに応え、深く手を握り締めた。

フインとの関係がこの先数十年も続くとはまだ知らずに。

3 オラリオ

それから数日間、フインと共にオラリオを目指して旅をして、色々なことがわかつた。

曰く、オラリオはダンジョンで盛んな都市。

曰く、ダンジョンに潜るためには恩恵が必須。

曰く、恩恵を得るために下界に降りた神々のファミリアに入らなければならぬ。

(……神々が下界に降りているとか、どうなつてゐんだよ、この世界……)

これらは全てこの世界で生きる住民なら誰でも知つていて当たり前の常識らしい。

しかも、降りていているという神々はゼウスやらポセイドンやらと、どちらも聞いたことがある有名な神々ばかり。

完全に前の世界と無関係……という訳でも無さそうだつた。

極力、ゆっくりと呼吸したりして感情が顔に出ないようになつてもりだが、それでも驚きを隠しきることが出来たかと言われると自信がない。

しかし、フインに突つ込まれることも無かつたので何とか誤魔化せたのだろうと思つてゐる。

話題はそういう大きなものばかりでなく、個人的な話もあつた。

フインは幼く見えるが、それは小人族の特性故のことで、実年齢はもうすぐ二十になるのだとか。

冒険者になるはある目的を達成するためだとか。

そんなフインから見た俺の種族は兎人なのだとか。

この世界では完全にイレギュラーである鈴仙・優曇華院・イナバが

兎人に該当されるかは不明だが、端から見ればそう見えるそういうので、いざ種族を名乗る際は兎人と名乗ろうと思つたりした。

そんな感じで情報収集を進めて一週間。

遂にその時はやつてきた。

「あつ、ようやく見えてきましたね」

そう言うフインに釣られて眼を凝らすと、遠くにうつすらと街影が見えた。

遠くから見てるのに、その全貌が見渡せない。
よほど大きいことが伺えた。

発見から小一時間。

流石のフインも街に着いてすぐにファミリア探しをしようとは思わなかつたらしく、何事もなく無事にオラリオにたどり着いた俺たちは、のんびりと街を観光していた。

「流石に大陸最大の都市だけあつて広いですね」

「ええ、ここでなら僕の目的もきっと果たせそうですね」

「えつと……確かに有名になるためだっけ?」

「はい、正確には少し違いますが、まあ大体似たようなものですね」

そんな会話を交わしながら歩いていると、大きな広場に出た。

「君たち、私のファミリアに興味はないかね!?」

「ファミリアに入ってくれるならば、この僕の永遠の加護を約束しよ
う」

広場では神々によるファミリアへの勧誘ラッシュが行われていた。俺はてつきり、冒険者が頼み込んでファミリアに入れてもらうと思いつ込んでいたので、まるつきり想像と反対なこの光景に思わず苦笑する。

フインも俺と同じような考えを持つていたのか、ぎこちない笑みを浮かべていた。

と、その時、周りで必死に勧誘していた男神の一柱と眼があつた。

何となく嫌な予感がしてすぐに眼を背けるが、男神は見逃してくれるどころか、あろうことか大きな声をあげながらこちらに向かつて指を指してきた。

「美男美女発見!! 是非是非俺のファミリアに!!」

「え?」

「お?」

「ホントだ!? どうだい俺のファミリアに入つてくれないか——」

「までまで、そんな奴より私のファミリアに——」

先程まで勧誘していた人をすっぽかしてまでこちらに回る神々がいる始末。

チラとフインを見ると、フインは分かつてるとばかりに小さく領いた。

そのままその場でクルリと反転。

押し寄せる神々を背に、俺たちは脱兎の如く逃げ出した。

4 女神

すっかり日が落ち、月明かりが街を優しく照らし始めた頃。

俺たちは、路地裏に佇みながら、ぜえぜえと荒い息を整えていた。

昼頃から始まつた神々との逃走劇。

走りに走つてようやく撒いたのは、ほんの少し前のことだ。

「……それにしてもフイン。逃げ出して、よかつたのですか？」

呼吸が落ち着いてきた俺は、今更ながらにフインにそう問い合わせた。

「いいんだよ。もしかしたら今後一生お世話になるかも知れないんだ。それに僕の場合目的が目的だからね。ファミリアはじっくり吟味した上で選びたい。強引に入れられるのは御免被るよ。……それより鈴仙。君はよかつたのかい？　あの中には情報を扱っているファミリアも有つたかもしれないのに逃げ出しちゃって」「私もフインと同意見ですよ。適当に決めたら絶対後から後悔しますし……それに」

フインと旅した一週間で、ファミリアに入るこの重要性はよく理解できている。

確かに情報が欲しいのなら情報を扱っているファミリアに入るのが一番良いのだろう。

一般的には。

しかし、俺が求めている情報は、こことは異なる世界の情報。とてもじやないが、一般的とは言い難い。

情報を扱っているファミリアでも流石に取得出来ない可能性が高い。

「——それに入るならフインと同じファミリアに入ろうと考えていますので」

だとしたら、情報を扱っているファミリアより、知っている人がいるファミリアに入つた方がいい。

だから俺は、フインと同じファミリアに入ろうかな、と思つていた。
「……僕が入ろうとしてるのは探索系だけど、それでも良いのかい？」
「ええ、まあ、私の求めている情報は何年、何十年かかっても手に入らない可能性の方が高いです。その間ただ待つのも……ちょっと。
なので、冒険者になつてダンジョンに潜るのも悪くないかな……つて」

「突然死ぬかも知れないよ」

「それは日常生活でも同じことでしょ？ 突然犯罪に巻き込まれるかも知れませんし……前例がありますし」

「前の時みたいに庇つてあげられないかも知れない」

「当然です。いつまでも助けてもらえるなんて思つてません。だからこそ、私はダンジョンに潜ろうと正在するんです。少しでも強くなつて、自分に降りかかる火の粉を払えるように」

そう言うと、フインは頭をガシガシ搔いて、困つたように笑つた。

「あー、うん。君の覚悟は分かつた。試すような事を言つて悪かつたね……じゃあ改めてよう——」

「——話は聞かせてもらつたで!!」

フインの言葉を遮るようにして、そんな声が聞こえてきた。

振り返つて見れば、そこには赤髪の糸目の女性が立つていた。

寂しいくらい胸がない以外は普通の女性に見えるが、纏つている

オーラが違う。

この人は神なのだとすぐに気づいた。

全ての神が、先程追いかけてきた神と同じじゃないと頭では分かりながらも、自然と身体が警戒してしまう。

それはフインも同様で、俺の眼から見ても分かるほどに警戒心を露していた。

「あー、始めて謝つとくわ。ゴメンな。盗み聞きはするつもりはなかつたんやけど……ついな。堪忍してや」

しかし、そんな俺たちの様子に気づいていないのか、もしくは気づいていながら放置しているのか赤髪の神は、あっけらかんに笑うと、その目を更に細めた。

「まどろっこしいことは嫌いやから单刀直入に言うで。二人とも、ウチのファミリアに入らなへん？ 先に言つとくと、ウチはまだ出来たばかりのファミリアや。せやから今ならそれなりに優遇させてもらうで」

ニヤリと笑みを浮かべる女神。

その笑みは、どことなく胡散臭かつた。しかし、フインはその女神の話に興味を持つたらしく、

「優遇…ですか。でしたら、三つほど入るにあたつてお願ひしたいことがあるのですが…」

「ウチに叶えられる範囲なら何個でも構わへんで。まあ、とりあえず立ち話もアレだし、ウチのホームで話そうや」

詳しく述べを聞くため、女神のホームに向かうことになった。

これが俺たちと口キを名乗る女神との出会いだつた。

5 入団

「ほな、ここがウチのホームや」

神々に見つからぬよう人通りの少ない路地道を歩き続けて数十分。口キが指で指す方向には大理石で出来た巨大な建築物があつた。

頑丈そうな門に広い庭園、建物へと続く石畳の道に沿えるように並べられている屈強な戦士の像。

「そ、それじゃ案内するで」

さすがは神。立派なホームを持つていてるのだ、と内心感心していると、何故か口キは気まずそうに眼を反らし、その建物を素通りした。そして、口キの足はその後ろの日陰にひつそりと立つていた、小さくボロい木造の小屋に向かっていく。

「え……まさか……これがホームなんですか？ 小さすぎません？」

どう見ても神とその眷属が拠点にできる大きさには見えない。

恐る恐る訊ねると、口キは小屋を背に無い胸を張つて、宣つた。

「せやで！ これがウチのホームや！ 汗水垂らして働いて手にいたホームや！ 何か文句あるか！」

神の威厳は何処へやら、もうヤケクソに叫んでいるようにしか見えない口キから、俺は静かに視線を外し、フインを見る。

俺の視線に気づいたのかフインは、苦笑いを浮かべた。

「……まあ、出来たばかりって言つていたからね。想像はしていたけど……。とりあえず神、口キ。中に案内してくれませんか？」

「おお、せやな。入り、入り」

本気で蹴り飛ばしたら簡単に壊れてしまいそうな扉を開けると、中は外見からは想像できないほどの広さで……なんてことはなく外見通りの狭い室内で、口キの眷属なのだろう。

酒臭い男性に耳の尖った女性が言い争いをしていた。

「——これだから石頭のエルフは」

「なんだ戦るのか？ この筋ドワーフが……ん？ なんだ、口キ。帰つてきてたのか……そいつらは？」

「新しい入団希望者や！ ……ええと、名前は……」

「こちらに気づいた女性の問いにロキは満面の笑みで応える。

「僕はフイン・デイムナ。気軽にフインと呼んでください」

「私は鈴仙・優曇華院・イナバです。鈴仙とお呼びください。……と

言つても、まだ入団するつて決めた訳じや無いんですけど」

「なるほど、ロキに連れてこられたロキか。先駆者として忠言だが、こうなつたロキはしつこいからな。早めに折れることをオススメする。おつと、申し遅れた。私はリヴエリア・リヨス・アルーヴだ、リヴエリアと呼んでくれ」

「オレはガレス・ランドロックだ。まあ、そればかりはエルフに賛同する。ロキに見初められたのが運の尽きだつたと思つてくれ」

同情するような眼を向けてくる二人に、何があつたのか……とてもじやないが聞けなかつた。

「ウチの扱い酷過ぎへん!？」

場の空気に居たまくなつたのかロキから突つ込みが入るが、誰も「言いすぎた」とか「冗談」とか、謝つたりしない。

つまりは、そう言うことなんだろう。

「——それよりもロキ。条件について少し二人きりで話したいんだけど、いいかな?」

一頻り笑いあつたあと、ようやくフインが本題を切り出した。

「あー……リヴエリア、ガレス、……鈴仙、ちょっと外出でもらつともええ?」

真剣な表情のロキの言葉に、俺たちは頷かざるを得なかつた。

結論を言おう。

フインの出した条件は、無事受理されたようで、フインがロキ・ファミリアに入ることになつた。

無論、フインと同じところに入団すると言つた手前、俺も同じくで。時は過ぎ、その日の夜。ロキは唐突に叫ぶようにして言つた。

「じゃあ、お待ちかねの恩恵の授与タイムやで! ほな、まずは鈴仙

ちゃんから行こか！　上着を脱いでウチに背中向けて座つてな。男
は外に出とつてや」

いきなり脱げと言われて戸惑うが、リヴェリアの平然とした顔を見る限り、ロキの暴走ではなく、恩恵の授与に必要な行程らしい。

フインとガレスが外に出たことを確認してから、ロキの指示通り、上着を脱いで、ロキに背を向ける形で用意された椅子に腰を下ろした。

「ぐへへ、綺麗な背中やな……んじやジツとしててな」

「はい」

身の危険を感じながらも頷くと、ロキは自分の指の腹に針を刺して、血が滲む指を俺の背中で走らせた。

妙に手つきが厭らしいと感じるのは俺の氣のせいだと信じたい
……

おおよそ数分。作業が完了したのか、ロキの手が止まつた。

「うし、恩恵の授与はちゃんと成功したわ。これで鈴仙ちゃんは正式にウチの眷属になつたわけや！　今後ともよろしゅうな！」
「よろしくお願ひします、ロキ」

こうして、俺はロキ・ファミリアの一員となつたのだつた。

6 冒険者登録

かくして神の恩恵を手にいれたわけだが、正式に冒険者としてダンジョンに潜るためには、もう一つ必要な工程があるらしい。それは、ギルドでの冒険者登録だ。

ギルドはダンジョンの管理や、モンスターを倒した際に手に入る魔石の買い取りを行っている巨大な組織で、そこを通さない限りはダンジョンに潜ることは許されないのだとか。

故に、翌日の早朝、ダンジョンに潜る前に、俺とフインはリヴエリア、ガレスの案内の下、ギルドへ向かうことになつた。

「——大体あのときもこの弱虫エルフが——」

「——あれは貴様が完全に悪いだろ脳筋ドワーフが——」

何が気に食わないのか、ホームからずつといがみ合う二人に連れられ歩くこと十数分。

目の前で延々と繰り広げられる口喧嘩に、こんな調子で、本当にダンジョンに潜つても平気なのだろうか。と真剣に疑い始めた頃。

噂のギルドだろう、白い大きな柱で作られたそれらしい神殿が見えてきた。

早朝だというのに、巨大な門からは無数の人が出入りしていて、如何にギルドという組織がオラリオに住む人にとって、重要な役割を果たしているのかが一目でハッキリと分かる。

当然と言うべきなのか、ギルドの中は人で溢れかえっていた。
「こつちの列が空いてるな」

俺たちは比較的空いてる列に並ぶ。

「……あのガレスさん?」

だが、そんな中一人だけ動こうとしないガレスに、疑問を持つて声をかけると、ガレスは豪快に髪を搔いて宣つた。

「……オレはこの辺をブラついて待つとく! あとは任せたぞ貧弱工

ルフ

「おい、どこ行く気だ!? この馬鹿ドワーフ! この——」

あばよ、と背を向け手を振るガレスに、リヴエリアは怒りで身を震わせ、杖を片手にぶつぶつと咳き始めた。

俺にはそれが何なのか分からなかつたが、フインは即座に気づいたようで、慌てて止めさせる。

「待てリヴエリア! こんな人通りが多いところで魔法を使おうとするな!」

(え、魔法……!?)

バツとリヴエリアを見ると、どうやら本当にフインの言うとおり魔法を使おうとしていたらしく、ばつが悪そうな顔で頭を下げた。

「すまない。つい頭に血が上つて……」

「……反省してるならいいさ。次からは気を付けるように……って鈴仙、君は何故残念そうな顔をしてるのかな?」

「え、いや……氣のせいですよ」

魔法が見れなくて残念だつたとは口が裂けても言えない。

フインの訝しげな目線に笑つて誤魔化し、ふと考える。

(魔法と言えば……そいや俺も使えるんだつけ……)

思い返すのは昨日「絶対に他の冒険者には話すな」と口キに念を押されながら見せられたステイタスの写し。

そこにはしっかりと魔法の存在が書かれていた。

(確か……指を銃の形にして”ロックオン”って言うんだつけ……)

右手の指で銃の形を作つてみる。

あとはただ”ロックオン”とさえ呟けば魔法が発動する。

そう聞いていたものの、科学が発展した日本にこれまで住んできた影響だろう。

魔法は実際に無いものと思つてゐる自分が心のどこかにいて、いまいち実感が湧かない。

「——仙、鈴仙」

「——えつ、あ、はい？」

「次は僕らだよ」

と、そんなことを考えているうちに順番が回ってきたようで、慌てて銃の形にしていた指を崩すと俺は受付へと向かつた。

7 初ダンジョン

「ガレス！」

「分かつとるわ！」

フインの声にガレスが反応して、俺の前に飛び出し盾を構える。

ゴブリンの振り下ろした棍棒を防いだ。

ガキンと鈍い音が鳴るが、ガレスはビクとも動かない。

見かけ倒しではなく実際にかなりの力があるのだろう。余裕綽々といった感じだ。

どのくらい力があるのだろうか。疑問に思う。一度ステイタスを見せて欲しいものだ……

そんな事を考えているとフインから声が飛んできた。

「鈴仙！ 次は君だぞ！」

「分かつてます」

いけない、完全に他事を考えてた。

戦闘では少しの隙が命取りとなる、そう聞いていたはずなのに……

思考を強引に切り換える。

今は目の前の敵に集中しなくては。

俺は指で銃を作り、ゴブリンの額を目掛けて、言葉を紡いだ。

「ロツクオン」

紫色の光の銃弾が、人差し指の先から撃ち出された。

昼時、俺たちは地上へと帰還。バベル三階で魔石を換金して二階にある簡易食堂へと赴いていた。

「大体こんなものか……どうだ、初のダンジョンの感想は、鈴仙？」
店でご飯を注文しながらリヴィアリアが訊ねてくる。

「思つてたよりも敵が弱かつたです。これならもつと下の階まで行く

か、各個人で探索した方が効率が良いと思いました」

今回戦ったコボルト、ゴブリンはどれも俺の魔法で一撃だつた。そのため、自分の魔法の威力が計れずにいた。

正直、期待はずれも良いところだつた。

この程度なら一人でも全然倒せる。わざわざチームでやらなくてもいいのでは……？

そう思つてたことを率直に言うと、リヴエリアが苦笑いした。

「確かに鈴仙の魔法は詠唱が短く威力が高い。だが、慢心はやめた方がいい。死に繋がるからな。確實に少しずつ進めていこう」まあ、そりやそんなんだろうけども……やはり効率が悪いと分かつていてそれを続けるのは何だかなあと感じた。

……つて、あれ、俺つてこんなに闘争心旺盛だつたつけ……？　いや、俺はもつと保守的な考えだつたはずだ。

分かりやすく調子に乗つて自分に、らしくないと首を横に振つていると、今度はフインへとリヴエリアは問い合わせ掛けた。

「フイン、お前は？」

フインはご飯を食べていた腕を止め、小さく頷き、口を開く。
「僕は……特にないかな。想像していただつたよ」

「そうか」

「それよりどうするんだ？　午後からもまた潜るのか？」

暴れ足りないと豪語するガレスに、リヴエリアは冷ややかな目を向けながら言つた。

「いや、今日はここまでだ。午後はロキが空けておいて欲しいと言つていてな。特に鈴仙」

「え、私？」

自分を指差して首を傾げると、リヴエリアは深く頷いた。

「ああ、何やら話がある……みたいなことを言つてたな。まあ、大方セクハラだろうが……。セクハラされそだつたらすぐ呼んでくれ、何とかしよう」

「え、あ、はい。分かりました」

真剣な顔で告げるリヴエリアに、「何をやらかしたらこんなに警戒

されるんだ……一体何をやつたんだロキは」と冷や汗を流しながらも俺は領き返した。

8 弱さ

食事から数十分後。私とリヴェリアは二人でホームへ向かっていた。

「鈴仙と話があるならオレたちは少し遅れて帰つても問題あるまい」と言うのはガレスの言で、リヴェリアの反対を強引に押し引き、フインを連れて武器を見に行つてしまつた。

その行動がリヴェリアの不興を高く買ったようで、リヴェリアは帰り道ブツブツと謗つていた。

「——つたく、アイツは本当に……一度殺さないと馬鹿は治らないんじゃないか……大体武器なんて見て何が楽しいのだか……何が男のロマンだ馬鹿馬鹿しい。なあ、鈴仙？」

不意に話題を振られた。

実際のところ俺も武器を見たかつたし、男のロマンに同感できるのだが、威圧するような視線に思わず頷いてしまう。

「あ、あはは。そうですね……」

「だろう？ 大体アイツはいつも男のロマンで済ませるから——」

それからも男のロマンをデイスる小言は続き、俺は冷や汗を流しながらも頷き続けた。

——

「帰つたぞ口キ」

「ただいま帰りました口キ」

ホームに帰ると、即座に口キが出迎えてくれた。

「おお、待つてたでー！」

ガバッと手を広げて抱擁してこようとしてきたので、即座にリヴェリアの後ろに隠れる。

「……口キ、過度なスキンシップはやめろと言つたよな？」

「い、嫌やなあ、リヴエリアたん。こんなのはまだ軽いスキンシップー」

一
口
キ?
」

「ほんまごめん！ 少し魔が差したんや！」

素早く土下座して謝罪する口キにリヴエリアは頭を押さえて嘆息。

かなり洗練された土下座に呆気にとられていると、リヴエリアは俺の方を振り返り言つた。

「良いか、鈴仙。これから私は席を外すが、何かされそうだつたら絶対に大きな声で叫ぶんだぞ？」すぐ駆けつけるからな」

コクコクと頷くと、リヴエリアは「話が終わつたら呼んでくれ」と外へ出ていった。

そんな雰囲気を破つたのはロキがつ
気まずい感じの沈黙が暫く流れる。

「なあ鈴仙ちゃん」

「はい」

ヘラヘラとした笑みを止め、真剣な表情で口を開いた口キは、少し躊躇つて、しかしハツキリと用件を告げた。

「何かウチに隠してることあるやろ?」

「...」

思いもがけない言葉に固まっている俺に、口キは淡々と言葉を紡いでいく。

「神にはな、嘘か真か見抜く力があるんや。昨日の自己紹介ん時、鈴仙ちゃんは嘘は言つてへんけど真のことも言つてへんかつた——なあ
鈴仙ちゃん、何を隠しとるんや？」

心当たりはある。むしろ心当たりしかない。

例えば名前。確かにこの体の名称は鈴仙・優曇華院・イナバだ。しかし、本質は俺という全然違う生命体。

そう言つたところで反応したのだろうと思う。

全てを見抜くような神の目。

(全部告げたら楽になるのかな……)

そんな目を向けられた俺は、そう思い、全て白状しようとして――

「……ごめんなさい……言え……ません……」

不意に頭に過つたのは”ファミリアを追い出される最悪の展開”。ロキから、ガレスから、リヴエリアから、フインからも忌み嫌われ一人になる未来を想像してしまい。

結局俺は謝ることしか出来なかつた。

怒られるかと思った。当然だ、聞かれた質問に対しても質問に対して答えを言つていないのでだから。

しかし、ロキは、叱りもせずただ、優しい目で笑い掛けってきた。

「……そか。ほんならしゃーないな。待つてるから、言いたくなつたらいつでも聞かせてな」

どこまでも優しいロキ……しかしそれでもどこまでも弱い俺は告げることは出来なかつた。

「ごめん……なさい……」

今は言えない。

だけど、いつか、言えるくらい強くなりますから……

そんな決意を固めながら、また小さく謝罪の言葉を口にした。

9 ランクアップ

よくあの日のことを思い出す。

この世界に転生してきたばかりの日のことを。

オラリオに来てから一年と半年が経つた。

生活は……毎日午後までフィン、リヴエリア、ガレス、そして俺の四人でダンジョンに潜つて、素材を換金して、たまに騒いで、寝る、の繰り返し。

日本にいた頃には考えられないほど戦い漬け、命懸けの毎日だ。そんな毎日を繰り返してきたものだから、すっかりこの身体の扱いにも慣れてきて、この頃は鈴仙と呼ばれることにも違和感を感じなくなってきた。

むしろ昔の名前を忘れそうで心配に思つているのが現状だつたりする。

また、この一年半で様々なことが判明した。

例を挙げるとするならば、戦闘時に俺の性格が変わることなどだ。フィンやリヴエリア、ガレス曰く、戦闘時の俺は攻撃的な態度且つ高圧的な口調になつてゐるらしい。正直自覚は全くないのだが……皆口を揃えて言うからにはそうなんだろうと思う。

原因は…………おそらく原作の鈴仙も戦闘時は好戦的な性格をしていたからだと考えている。てか絶対それだろ。むしろそれ以外の原因など思い付きもしない。

尤も、原作では自分の都合で性格を変えることが出来るみたいだから、勝手に切り変わつていてる今の俺とは少し仕様が違うが……何にせよ現状対処法方が見つかないので、こちらは放置案件だ。と、まあ、ダンジョンに潜つたり新事実を発見したりと見る人が見れば中々充実した毎日を一年半もの間送つていたわけだが。

今日、ようやくその成果が目に見える形をもつて現れた。

「鈴仙、準備はええ？」

確認するような口キの声に、俺は閉じていた瞳を開ける。

「はい。いつでもいいです」

「じゃ、いつも通り脱いで背中を向けてな」

「分かりました」

言葉に頷きで返した俺は、即座に上着を脱ぎ、ロキに背中を向けてな。
いつも通りロキは針などを手早く使い、ステイタスを更新していく。

そして、ゆっくりと息を吐いて、声を大きくして言つた。

「おめでとう。鈴仙……ランクアップやつ！」

「ありがとうございます、ロキ」

レベルが1違うだけで、やれることが別次元に変わる。
先に冒険者になつていたリヴエリアやガレス、そしてフィンは既に
レベル2。

ロキフアミリアでは俺だけがレベル1だつた為、どことなく足手ま
とい感があつたのだが、それも今日まで。

——ようやく追いついた。

この世界で初めてできた友人たちと肩を並べられることを嬉しく
思いながら、

俺はホームの外で待機しているフィン達にランクアップを報告す
るべく、扉を開けた。